

ヨハネ 13 章には、主イエスが十字架につけられる前、弟子たちと囲んだ最後の晩餐の席での出来事が記されています。1~11 節には、主イエスが弟子たちの足をお洗いになった、いわゆる洗足の出来事が記されています。当時の人々は、今のような足全体を覆う靴ではなく、サンダルのような履物を履いていました。ですから、足は泥や埃にまみれた体の中で最も汚い部分だったのです。外から家に入る時には、たいてい足を洗うのです。イスラエルにおいて、この足を洗うというのは奴隷の仕事とされていました。しかも、ユダヤ人ではなく異邦人の奴隷の仕事であったようです。それは、人々が最もやりたがらない仕事でした。つまり、主イエスが弟子の足を洗ったということは、最も低い僕（奴隷）となつてご自身の弟子たちに仕えたということです。この時、弟子たちは、本来自分たちこそ仕えるべき主人である主イエスが、弟子達に仕えているという事態に驚き戸惑いました。その驚きと戸惑いは、弟子ペテロの言葉に表れています。6 節には、ペテロが、「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」と言ったことが記されており、8 節には、「決して私の足をお洗いにならないでください。」とあります。常識的に考えればあるはずもないような事が起こったのです。この洗足の出来事は、主イエスがこれから赴く十字架を指し示しています。主イエス・キリストが十字架につけられて殺されたというのは、私たち罪ある人間に神の子である主イエスが仕えて下さった出来事です。それは丁度、奴隷が足を洗うように、十字架において、私たちの最も汚い部分、罪を洗い清めて下さったのです。私たちの信仰生活の中心は、この十字架の救いに与って歩むこと、つまり、主イエスに、仕えていただくということなのです。最後の晩餐の席で、主イエスは、この信仰の中心ともなる、十字架のことをはっきりとお示しになったのです。

最後の晩餐の記事は、ヨハネによる福音書だけでなく、マタイ、マルコ、ルカ福音書にも記されています。しかし、それら三つとヨハネの記述は決定的に異なっています。マタイ、マルコ、ルカ福音書では、最後の晩餐の席で、主イエスは、過越の食事の規定に則りつつ、パンとぶどう酒を手に取り、それをご自身の体と血として、弟子たちにお配りになられました。世々の教会が守っている聖餐の食卓を制定されたのです。そのようにして、これから起こる十字架は弟子たちのためのものであり、神の一人子である主イエス・キリストが、人間の罪を贖うために、ご自身を捧げ、肉を裂き、血を流して下さるのだということをお示しになったのです。一方、ヨハネによる福音書は、聖餐については記さず、洗足の出来事が記されています。ここで注目したいことは、最後の晩餐における、聖餐も、洗足も、共に同じことを示しているということです。どちらも、主イエス・キリストが十字架において命を捨てることによって、ご自身を人々に与え、仕えて下さったということを表しています。キリストの愛が示されているのです。しかし、ヨハネによる福音書が特に洗足の出来事を記したということには大切な意味があります。そのことは、12 節以下に記された主イエスの言葉から分かります。主イエスは弟子の足を洗い終わると席につき次のようにおっしゃったのです。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」(12~15 節)

主イエスは、足を洗うということによって「模範」をお示しになったのです。十字架の出来事は、私たちの救いであり、又、私たちにとどのように生きるかを示す模範です。そしてイエスを主とする時に、つまり、イエスに従って歩むというならば、必ず、十字架の主を模範として歩む、具体的な歩みが生まれて行くということです。

主イエスは、この箇所、人々がご自身を『先生』とか『主』と呼んでいたことを指摘しつつ、「あ

あなたがたがそう言うのは正しい」とおっしゃっています。主イエスは、私たちにとって「主人」、従うべき方であると共に、「先生」でもあるのです。先生とは、生徒たちの模範となる人です。生徒の成長を願って、どのように歩むべきかを、手取り足取り親身になって教えてくれる人です。もし、生徒の立場や力量に目を留めることなく、ただ闇雲に知識を語るだけならば、たとえ、そこでどれだけ良い内容のものを語れたとしても、良い教師とは言えないでしょう。本当に良い教師とは、その人がしっかりと教えるべきものを持っていることと共に、生徒に目を向け、生徒の立場に立って、自ら模範を示しつつ教えられるかどうかということにかかっていると言えます。主イエスは、まさに、良い先生として、ただ、ご自身の十字架の恵みを示すだけでなく、そのことに生かされる者の生き方もお示しになったのです。もちろん、十字架で主イエスが仕えて下さったことによる救いに与っているということは大切です。それは信仰の原点でもありますから。しかし、下手をすると、その救いに与るだけで満足し、そこに留まってしまいうことが起こるのです。そして、主イエスの十字架の救いは受け入れるけれども、そこから具体的な歩みは生まれて行かないということも起こってきます。主イエスは、弟子たちに具体的に十字架の救いに生きるとはどういうことなのかを自らお示しになられたのです。それが互いに足を洗い合うということです。

主イエスを模範とする歩みとは、イエスが語った聖書の教えをただただ固く守り、清く正しい生活をするということではありません。主イエスが弟子たち一人一人の足を、僕となって足を洗って下さったように、自らの身を屈めて人々に仕える者となるということです。では、人々の足を洗うとはどういうことなのでしょう。人の足を洗うためには、自分の膝をかがめて身を低くしなくてはなりません。足を洗うというのは、自らを低くすることです。更に、言うならば、仕えるとは、主イエスがなされたように隣人の罪と重荷を担うということです。これは、私たちにとって簡単なことではありません。主イエスご自身もあなたがたは今は「互いに足を洗い合う」ということがどういうことを意味しているか分からないと言っておられます。ただ私たちは、常に、自分を高めようとしています。少しでも自分が評価されたいと願っていますし、その反対に、自分が軽く見られたり、見くだされることには耐えられないのではないのでしょうか。ですから、自分を低めること、人の上に立てるにもかかわらず、敢えてそうせずに仕えるというのは、屈辱的なことと映るのです。

ここで、「互いに」足を「洗い合う」と言われていることに注目したいと思います。「あなたは、隣人の足を洗いなさい」と言われているのではないのです。主イエスが私たち人間の足を洗い、仕えて下さると言う時、それは、一方的な神の愛です。しかし、私たちがそれを模範とし、私たちの間で、主イエスの愛が生きられる時、それは一方通行ではないのです。自分が周囲の人の足を洗うというだけでなく、自分も周囲の人に洗っていただくのです。例えば、自分は、周囲の人に仕え、周囲の人を赦すように務めるけれども、自分自身は周囲の人に仕えてもらう必要はない、赦してもらったりする必要はないと感じているのであれば、そこで、本当に隣人に仕え赦す歩みは生まれてきません。私たちは、自分も一人の罪人として、主イエスに赦されているだけでなく、多くの教会の兄弟姉妹に赦されているということを深く知らされ、そのことによって生かされる時に、本当に自らも仕え赦す者とされるのです。人を赦すことは難しいですが、人に赦される、あるいは赦してもらおうということも難しいことです。主イエスを模範とするということは、隣人との交わりの中で自分が、罪を赦すことと、罪を赦されるということにおいて具体化していきます。私たちが、イエスを主とし、主イエスを模範とする時、そこには、仕え合い、赦し合う共同体が生まれます。この共同体こそ、キリストの体なる教会なのです。イエスを主として歩むということは、教会共同体と密接に結びついていると言っても良いでしょう。そのような共同体と無関係に、自分だけで、イエス・キリストを信じる信仰はあり得ないのです。

私たちは実にしばしば、このことを忘れてしまいがちです。キリストの救いを知らされ、イエスを主と

呼んでいながら、そこで主イエスを模範としていないことがあるのではないのでしょうか。実は、そのような時、本当には、イエスを主としていないのです。もし、イエスを主と呼んでいながら、つまり主イエスを救い主として受け入れ、その救いに与っていながら、十字架の主イエスを模範としていなければ、それは、本当には、イエスを主としていることにはなりません。つまり、イエス・キリストの救いを受け入れ、イエスを主と告白しつつ歩むことと、その救いに示されている姿に倣って歩むこととは一つなのです。16節には「まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。」とあります。「主人」「遣わした者」とは主イエスのことであるのに対し、「僕」「遣わされた者」とは主イエスに従う者たちです。私たちは、主人である、主イエスにまさることはないのです。イエスを救い主と呼んでいる私たちが、事実、主イエスを模範としていないのであれば、自ら、主人である方にまさっているかのように振る舞っていることになるでしょう。

更に、続けて、17節で主イエスは、「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それをを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」とおっしゃっています。「このこと」というのは、主イエスが模範を示しており、主に仕えて歩む者は、決して主イエスにまさらないが故に、主イエスに倣って歩まなければならないということです。そのことを理解し、本当に主イエスに倣って行く時に、その歩みが、私たちの常識とは異なるものであったとしても、そこに神様が祝福を与えて下さると言われているのです。

最後に、私たちが、十字架の主イエスを模範とする歩みにおいてこそ、真にキリストが世に示されていくということを覚えたいと思います。主イエスは、私たちのことを「遣わされた者」とおっしゃいました。キリスト者たちは、主イエス・キリストによって世に遣わされた者たちなのです。世に遣わされ使命を与えられているのです。それは、キリストに倣い、互いに仕え合う群れを形成することによってキリストを証しするということです。20節には次のように記されています。「わたしの遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。」ここでは、世に遣わされたキリスト者たちを通して、主イエス・キリストが、更には父なる神さまが受け入れられていくことが見つめられています。

自分が、主人となって振る舞いたいという思いに捕らわれるのが私たちです。しかし、私たちがそのような自らの思いに従って歩む時に、キリストが証しされることはありません。十字架の救いを成し遂げて下さった主イエスを真の主とし、この方を模範として互いに足を洗い合う時に、私たちを通して真のキリストが証しされていくのです。

結局は私たち一人ひとりと主イエスとの関係に行きつきます。あのペテロは主イエスがペテロの足を洗ってくださるという時に「決して私の足を洗わないでください」と言いました。これは謙遜そうに見えて、結局、神様の世話にならなくてもやってゆけるという傲慢な思いが根底にあります。つまり神様のご真実さを信頼していないということです。他方、ペテロは洗って下さるなら手も頭もと言いました。それならもっとというわけです。これは今度はもっと神様にしてもらわなければ足りないという思いです。この洗足をされることで主イエスはその愛を最後まで与えつくされたのです。これで十分なのです。

一人一人が主イエスとの健全な関係を保ち、互いに仕えあう関係、赦し合う関係に生きるならキリストを証しする群れとして主は祝福を与え、用いてくださるのです。あなたは今週、主にあって誰の足を洗う、つまり仕えていこうとしているのでしょうか？ してあげる、することだけではありません。赦してもらうことも含まれています。思いがけないところに神様の恵みと祝福があることを体験させていただきたいと思います。